

#### (4)「体験—二つのワークショップ」みんなが楽しめる美術館 づくり 1日目

とき：2014年2月8日〔土〕14時-16時30分

ところ：展示室1・2、徳島県立二十一世紀館多目的活動室、  
建物エントランス等公園内敷地

展覧会名：所蔵作品展「徳島のコレクション2014—I」

参加者：52名

手話通訳：2名（徳島県聴覚障害者福祉協会）

要約筆記：3名（特定非営利活動法人 文字情報支援ひこ  
ばえ）

進行：梅田亜由美（女子美術大学非常勤講師／フリーラン  
ス）、竹内利夫（当館）

当日の流れ：1日目は「体験」として二つのプログラムを行っ  
た。インクルーシブ・デザインの方法論と、美術館また美術鑑  
賞に親しむことが先決であるとする当館の実践論が融合  
された「徳島流」の場が生まれた。手話を使う人、要約筆記を  
使う人を「リードユーザー」とする5つのグループに分かれ、  
鑑賞プログラム「勝手にしんさいん」、インクルーシブデザイン  
の手法による「美術館を観察しよう」の二つの活動を、展示室  
および施設各所で行った。多目的活動室に集合し、意見交流  
した。

今年度の事業の一区切りとして2日間連続の交流の場を設  
けた。関東を拠点に行われている「みんなの美術館プロジェ  
クト」、「美術と手話を考える会議」の実践を踏まえつつ当館ら  
しい展開を探るために、梅田亜由美、西岡克浩、和田みさの  
各氏を招き、インクルーシブ・デザイン・ワークショップの方法  
を軸として企画した。開催要項にうたったように、「地域の関  
係者と一緒に勉強する場をつくること」、文化の森総合公園  
に関わる「様々な立場の人との関係が生まれる機会」として、  
多様な立場の参加があった。図書館や文書館など近隣施設  
の職員、県外の美術館職員、県内で障がい者や外国人の支  
援に携わる人など、聴覚障がいの当事者・支援者・教育者に  
とどまらない広がりがあった。(T.T.)



ワークショップ「美術館を観察しよう」の様子 1階エントランス(2014年  
2月8日)



ワークショップ「美術館を観察しよう」意見交流 1階多目的活動室  
(2014年2月8日)

#### (5)「対話—シンポジウム」みんなが楽しめる美術館づくり 2日目

とき：2014年2月9日〔日〕10時-12時

ところ：徳島県立二十一世紀館多目的活動室

参加者：58名

手話通訳：2名（徳島県聴覚障害者福祉協会）

要約筆記：4名（文字情報支援ひこばえ）

登壇者：梅田亜由美（女子美術大学非常勤講師／フリーランス）、西岡克浩（株式会社丹青社CGデザイナー／聞こえない人）、和田みさ（手話通訳士）、竹内利夫、亀井幸子（当館）

当日の流れ：2日目は「対話」としてシンポジウム型の場を設けた。亀井の進行で、竹内から当館のとりくみについて、梅田さんから「みんなの美術館プロジェクト」とインクルーシブ・デザインについて、西岡さん、和田さんから「美術と手話を考える会議」について話題提供を行い、参加者と意見交換した。梅田さんからは、ワークショップの参加者は被験者やモニターではないというインクルーシブ・デザインの根幹となる観点が強調され、和田・西岡の両氏は、美術館を含め多様な立場の人がともに考えることの重要性を主張した。

具体的な関東での活動例や「美術と手話」の事例をただ受け身の立場で聞くというよりは、前日の当館を材料とした意見交流の「親身になって語り合う」雰囲気から、会場は熱気に満ちていた。事業タイトルにかかげる「みんな」の語が、顔の見えないものではないことを、司会の亀井は指摘したが、それは2日間のこの活動に関わってきた人々と当館の間に自ずと発生していた関係性を言い当てたものであったかも知れない。年月を経て、現在の当館の取り組みの発想や精神面での支えとなっているのは、こうしたことである。（T.T.）

### 1-3 「みんなで創るユニバーサルミュージアム事業」

2014年度

#### (1) 事業の概要

この事業は近接する施設（県立博物館、県立二十一世紀館）と共同で、前年のユニバーサル事業を発展させたもの。実行委員会形式で地域の関係者との協力体制を組んだ。(1)聴覚障がい、視覚障がい、外国人、高齢者、就学前の5つのテーマでのワークショップによる意見収集。(2)展示、教材、サイン類の試作。(3)普及イベント。(4)手引き作成を通して地域に還元する。この四つの枠組みで活動した。



シンポジウム フロアから発言者が登壇（2014年2月9日）

徳島視覚支援学校・徳島聴覚支援学校との連携については、障がい者の地域貢献が学校側でも目標とされていることから活発で特徴的なものとなった。アートイベントサポーターがワークショップ運営や触察図開発などの面で活躍した。年度後半に検証・普及の機会として「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」を開催。特別展「三宅克己回顧展」では前年の取り組みを発展させ、手話通訳付きの展示解説と、要約筆記(パソコン入力による字幕表示)を取り入れた展示解説を行った。(T.T.)



アートでつながるユニバーサルミュージアム展

## (2) アートでつながるユニバーサルミュージアム展

ワークショップ型の意見収集・交流の活動から得られたアイデアを、具体的な形で提案し利用者に体験してもらう事業の流れの後半の山場が「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」の開催である。実際の美術展と普及事業の開催の形をとって、利用者の反応を問うた。11回の催しを行い199名の参加があった。

「交流トークをしてみよう」は、前年度のシンポジウムの講師であった西岡克浩さん(株式会社丹青社CGデザイナー／聞こえない人)と、視覚障がい教育研究者の半田こずえさん(明治学院大学講師／見えない人)に助言者の立場で関わってもらいながら、徳島視覚支援学校と徳島聴覚支援学校の生徒が、進行役をつとめつつ鑑賞や造形を楽しむ側も体験する。「美術を楽しむわたくし流」では全盲の半田さんから実際の彫刻を前に鑑賞の方法について聞き、西岡さんには手話による展示案内を実演してもらった。この日の会場には盲ろう重複障がいの方と介助を学ぶ方の参加もあり、たくさんの課題について意見交流や助言を得る機会となった。「てさぐり彫刻してみるで」は彫刻家の岩野さんが、徳島視覚支援学校のために開発したプログラムを一般向けに行うもの。大人から子供まで、また視覚や聴覚に障がいのある人の参加もあり、ともに創作し鑑賞し合う場となった。この他コミュニケーションの多様性を意識的にとり入れた鑑賞ツアーの実験的なアイデアを職員が講師となって試してみた。実際、乳児の表情や視線の様子を家族と職員が受け止めながら鑑賞を進める場面や、言葉に頼らず身振りや手ざわりなどを伝え合うゲームのような場面での対話や交流は、その後の



くつろぎコーナー(2015年2月)



美術を楽しむわたくし流 西岡氏の手話によるトーク(2015年2月14日)

研究を深める上で豊富なヒントを与えてくれた。他県の研究者や博物館関係者の参加もあり、体験を通じた意見交流ができたことも意義深い成果だった。

この展示空間と各種の催しは、美術館という場の可能性に期待する外部の人々の力なくして成立できない、独特の性格が際立っていたように思われる。(T.T.)

## 展覧会

展覧会名:「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」

とき:2015年2月10日[火]-22日[日]

ところ:展示室3、美術館ロビー

入場者数:1,914名

展覧会は3つのパートで構成した。ロビーのくつろぎスペースにウォームアップアイテムや交流ボードを配した導入部。展示室内に13点の所蔵作品とつぶやき音声ガイドなどの鑑賞グッズの提案を合わせて紹介した展覧会パート。そして保育所の子どもたちの所蔵作品へのアプローチに注目したコーナー。

## [出品作品]

川島猛 N.Y.-D.T.-10-1966(1965-66年)

日下八光 蓺蔭(1935年)

元永定正 ふにゃらくにゃら(1979年)

元永定正 せのひくいおれんじはまんなかあたり(1984年)

イヴ・クライン 空気の建築;ANT 119(1961年)

パブロ・ピカソ 赤い枕で眠る女(1932年)

ジュリアン・シュナーベル マルクス(1983-84年)

チャック・クロース マルタ/フィンガーペインティング(1986年)

バウル・クレー 子供と伯母(1937年)

アルベルト・ジャコメッティ 女性立像(1952年)

ヘンリー・ムーア 着衣の横たわる母と子(1983年)

アレクサンダー・コールダー 角ばった肩の生きもの(1974年)

オシップ・ザツキン 女性立像(1922年)

ジョアン・ミロ 人物(1976年)

## [活動紹介]

徳島市立八万保育所



いろんなコミュニケーションで楽しもう(2015年2月15日)作品から感じたことを言葉を使わず、布製の鑑賞グッズ「テキスタイル」の手触りで伝え合ってみた。



ミニ体験ツアー「ベビーカーアワー」(2015年2月21日)のんびりおらかなペースで美術館に親しんでもらう20分。保護者の方が日頃感じていることも色々聞かせてもらった。

徳島市立八万東保育所  
 徳島市立城西保育所  
 徳島市立不動保育所

[講座等]

日時	催し名	講師	参加者	場所
2月11日[水・祝] 11時-11時20分	ミニ体験ツアー ベビーカーアワー	学芸員他	16名	展示室3
2月11日[水・祝] 12時-12時20分	ミニ体験ツアー 手の感覚をつかって	学芸員他	12名	展示室3
2月11日[水・祝] 15時-15時20分	ミニ体験ツアー 頭の中でイメージできるかな	学芸員他	9名	展示室3
2月13日[金] 13時40分-15時	交流トークをしてみよう(徳島視覚支援学校・徳島聴覚支援学校の高校生が進行役をつとめる催し)	西岡克浩(株式会社丹青社デザイナー/聞こえない人)、半田こずえ(明治学院大学講師/見えない人)	36名	展示室3
2月14日[土] 10時-12時	美術を楽しむわたくし流	西岡克浩(株式会社丹青社デザイナー/聞こえない人)、半田こずえ(明治学院大学講師/見えない人)	65名	展示室3
2月15日[日] 10時30分-11時30分	いろんなコミュニケーションで楽しもう	学芸員他	5名	展示室3
2月15日[日] 14時-16時	てさぐり彫刻して見るで	岩野勝人(大阪成蹊大学芸術学部准教授)	9名	展示室3
2月21日[土] 11時-11時20分	ミニ体験ツアー ベビーカーアワー	学芸員他	27名	展示室3
2月21日[土] 14時-14時45分	ユニバーサル美術館へごあんない	学芸員他	10名	展示室3
2月22日[日] 11時-11時20分	ミニ体験ツアー ベビーカーアワー	学芸員他	5名	展示室3
2月22日[日] 14時-15時	いろんなコミュニケーションで楽しもう	学芸員他	5名	展示室3

※講師肩書きは当時

※手話通訳:13日・14日各2名(徳島県聴覚障害者福祉協会)、要約筆記:13日・14日各4名(文字情報支援ひこばえ)

(3)徳島県立徳島聴覚支援学校高等部ワークショップ

とき:2014年10月31日[金] 13時45分-15時

ところ:展示室1

展覧会名:所蔵作品展「徳島のコレクション2014年度第2期」

参加者:徳島聴覚支援学校高等部の生徒6名、教員7名(1名が手話通訳を担当)

担当:竹内利夫

記録:友井伸一、阿地恵奈(当館)、武知康広(アートイベントサポーター)

普通科、職業科の1年生から3年生のうち5名が博物館、6名が美術館で活動。美術館では、美術鑑賞の体験と手話による

高校生トークの検討をねらいとした。所蔵作品展会場で鑑賞プログラム「勝手にしんさいん」を体験した後、クレー〈子供と伯母〉(1937年)をグループで鑑賞した。生徒の事後の感想からは、鑑賞者により多様な見方があることや交流することに興味を持つ様子がうかがえた。展示室で「解説を聞く」ことや人前で美術鑑賞の感想を述べることも初めてであるためよい経験になったとの声がある。進行役としては、聞こえの程度や手話の学習経験に違いがある中で、対話型鑑賞を進める難しさを実感した。複数の伝達手段の保障や、元来コミュニケーションに困難を抱える参加者が能動的に話す・聞く意欲を持つための支援について課題が浮かびあがった。

この初めての授業の事前・事後を通じ、翌年2月に開催を予定していた「アートでつながるユニバーサルミュージアム展」で生徒がどのように活躍できるか相談を重ねた。学科をまたいで活動目標を共有して活動することは容易なことではないが、当初に期待した通り、高校生が司会や話者を堂々とつとめるイベントの実現につながっていった。前年のシンポジウム講師でありこの年の事業においても指導者を依頼していた、手話の話者である西岡克浩さんとの交流機会もこのイベント時に設けるなど、盛りだくさんの活動内容となった。

西岡さんらの活動をヒントに、高校生とともに美術を語るための手話を検討する課題については、目標としては大き過ぎたようだ。またこの10月の授業の場では、美術作品の質感や色彩の映え方など人の感じ方を交流するような事項についての手話による意思疎通はその場で成立しては消えていく性質のものであることを、引率教員から指摘された。現場かぎりのジェスチャーを活用するアイデアも観察者から提案されるなどして、2月イベント時のワークショップでは、マークや様々なツールを活用したコミュニケーションの工夫の試みへとつながった。事業の目に見える結果としては高校生によるトークということになるが、その過程には幾多の知恵や努力がたばねられている。(T.T.)



徳島聴覚支援学校高等部ワークショップ(2014年10月31日)先生の手話に助けられながら。想像し合いながら交流するよさと難しさがある。

#### (4) 要約筆記で楽しむ展示解説

とき:2014年11月15日[土]14時-15時

ところ:展示室3

展覧会:特別展「三宅克己回顧展」

参加者:27名